

2020年の南信州 きのこと遠征

小倉 豊史

例年、秋には主にハナイグチを求めて南信州に行くことにしている。今年はコロナウイルスの中、どうするか迷ったが、宿に感染の迷惑を掛けないため、キャンプ場を利用して行くことにした。

2020年4月頭の千葉県の緊急事態宣言から、在宅勤務が始まり、朝の散歩と近所での買い物程度の外出だけとなり、GW、夏休みも外出を控えていたため、久しぶりの旅行となった。

今回は、出発前に以前から少しずつ集めていた情報「食菌と間違えやすい毒きのこの対比」を現地で使える程度に整理し、印刷して持って行くことにした。

今年、3回行ったが、夏の終わりから南信州への降水量の少なさ、気温の高さから、9月下旬のハナイグチは絶望的で、近くの民宿の人や他県から遠征してきた玄人の人も、口々に『無い』と言う状況だった。それでも、久しぶりに山林を歩くことが嬉しく、キノコが採れないことは余り気にならなかった。



写真1 ハナイグチ

10月頭に、ハナイグチ(写真1)は、少し出てくるようになったものの、その数は例年にはほど遠い状況だった。

ただ、今回の宿泊先近くでは、これまで見たことのないキノコを見つけた。カサが直径20cm弱と大きく、集まって生えていた。知らないキノコであるので、食べることは無理と思いつつも、万が一後で判断がついた場合、後悔することは間違いないため、持って帰ることにした。

現地で図鑑を見て妻と相談した段階では、サケツバタケではないかということになった(写真2)。



写真2 サケツバタケ

帰宅後、吹春先生に写真(写真3)を送り、意見を求めたところ、サケツバタケと思われる返信を貰った。サケツバタケは、カサは火を通して椎茸よりコリコリと歯応えがあって、柄はスジばったものでは無く、シャキシャキとした歯切れのよい触感だ。



写真3 サケツバタケ

味としては僅かに和風よりではあるが、洋食のグラタンなどにも使えらると思う。鍋で食べると実に旨い。

胞子が黒いため、幼菌のうちにと凶鑑などに紹介されており、黒く胞子を持った

場合は綺麗に洗い流してから調理するようにと記載されているが、鍋などで胞子が分散してしまうような使い方ではそれほど気にしなくても、見た目も問題にならないし、味に影響があるとは思えない。



写真4 チャナメツムタケ



写真5 クリタケ

10月下旬になると、チャナメツムタケ(写真4)、クリタケ(写真5)が採れる時期になる。チャナメツムタケは採集の経験がそれほど多くないため、自力判断に不安があったが、事前の自前の判別資料を見て確実に分かるものだけにした。

こうしたキノコの採集の途中で写真6のキノコにも出会った。フウセンタケの仲間、クリフウセンタケか、オオツガタケと思われる。柄の先端の形状、カサの縁の外被膜の残りから恐らくオオツガタケだろう。



写真6 オオツガタケ?

他に、普段あまり見かけないアミハナイグチ(写真7)見つけたが、沢山採れるウツロベニハナイグチより旨いキノコだった。



写真7 アミハナイグチ

カラカサタケは、千葉でもそれなりに採っているが、判断に困ったものがあつた。千葉でよく採るカラカサタケに比べカサと柄の比が明らかに異なり(写真8)、オオシロカ



写真8 カラカサタケ?A

ラカサタケに似ている。カサは白地で、茶色の鱗片部分が大きく、柄にはダンダラ模様、カサの裏の色は白であり、オオシロカラカサとも判断も出来なかった。



写真9 カラカサタケ?B

この辺りで、他のカラカサタケも採った(写真9)。こちらはカサの色が薄茶色、千葉で見えるカラカサに近いが、柄が短いように思われる。

偶々であるが、この後、帰路の中央道のSAでオオシロカラカサタケ(写真10)を見かけた。カサと柄の比が写真8のものより更に1:1に近く、しかし、カサの地の色は写真8より茶色で、ヒダは緑色の部分があった。

地元人の意見を聞ければと思う場面も多々あったが、自分の認識のどこが曖昧か確認するよい機会だったように思う。

基本的に「判断できないものは食べない」と言うことにしかならない。



写真10 オオシロカラカサタケ

通常と異なる遠征の結果、違うキノコ達に会えた2020年秋となった。

コロナウイルスに対するワクチンによる安心できる免疫の確保、対応薬と治療方法の確立ができていない状況下であり、しばらく、自粛は続くと思う。

生物関係が自分の技術分野では無いため、千葉菌類談話会の観察会やスライド会、講演会が重要な情報源であり、刺激でもあったため、自分にとって活動が難しい一年となった。

学会などが主催する講演会をWebで行う試みがなされており、幾つかの講演会に参加できた。探さないと見つからないが、Web公開の動画で興味ある内容のものを発見して視聴することもできた。

ウイルスは変異によって環境適応していくようだが、我々も環境に適応しつつ、楽しみとゆとりをもった生活をしていきたいものである。